

パンのある幸せな食卓を

『プロのパン屋への道(11)〜缶ビール一本の内緒事〜』

文 木村安兵衛

text by Yasube Kimura

二 ユーヨークでお世話になったパン屋はエイミーズブレッド、チェルシーマーケットというシヨッピングモールにある店でした。

このチェルシーマーケットはチェルシー地区の倉庫街にあつて昔、ナビスコの工場だった建物なのですが、同社が退去してからは荒れ果ててしまい麻薬の取引、売春、殺人の名所として有名になってしまいました。当時のニューヨーク市長ジュリアーニのマンハッタン浄化計画で荒廃した地区にシヨッピングモールを作つてまともな人々を集客することで明るくきれいな一画にしようということになりました。おかげで昼間は明るく安全になり、現在は若手芸術家の街になった様であります。しかし当時はまだ夜になるとどこからともなくドラッグ売人やニューハーフ(と聞かされていましたが)の売春婦の娘達やその元締めが闊歩する街でありました。

地下鉄の駅を出ると麻薬中毒と思われるホームレス達から石や空き瓶を投げつけられます。まあ、力ない山なりの放物線で当たらないので実害はありませんでしたが、毎晩恐怖を感じるのでした。私の中学生時代は校内暴力華

やかなりし時代で隣の中学校は毎日窓ガラスが割られ、廊下にはバイクが走るなどというテレビドラマのような光景が繰り返られておりました。まさにその時代に引き戻された様な錯覚に陥るのでした。

しかし、こちらはちゃんと1日3食食べている健康的な男子であります。なぜまともな食生活もしない、不健康なジャンキーを恐れなければならぬのか?という疑問が沸々と湧き上がり大きくなっていきます。

その晩もホームレス達から空き瓶を投げつけられながらの出勤をしておりました。たまたま足元に飛んできた空き瓶が2、3個転がってきたので「日本の健康優良児をなめるなよ!」とばかりに彼らに投げ返すというハプニングがおきました。もちろん山なりの放物線ではなく直球です。幸いにも誰にも当たりませんでした。この晩を境に私にちよっかいを出す人はいなくなりました。

ただその光景をどこかで見ていた売春の元締めが寄ってきて「この前の一件以来、うちの娘がお前に興味を持つてしまった。俺もプロだからただとは言えない。1ドルでどうだ?」という話

をしてきます。普段ならばホモだから無理とか言つてやり過ごすのですが、今回はそうはいきません。「実は大きな声では言えないがインポで金がない」と伝えるとしようがないと去つてくれました。

ある朝、夜勤が終わり今日はちよつと贅沢に日本のビールでも飲みながら寝るかサッポロビールを買つて店を出ようとすると、あの元締めがいます。

「金がない奴がサッポロなんて飲むか」と言いがかりをつけるので、1本缶ビールをプレゼントして「内緒ね」とウインクする羽目になりました。

Profile

1969年生まれ。慶應義塾大学法学部卒業後、千代田生命保険相互会社に入社。その後アメリカで唯一のFDA(米国食品医薬品局)研究機関である米国立製パン研究所へ留学、ベーキングサイエンスを研究する。ニューヨーク、フランスにて修業を積んだ後、その腕前と経営センスを見込まれ、エリック・カイザーの在日パートナーとして、2000年に株式会社ブルーランジェリーエリックカイザージャパンを設立。2001年メゾンカイザー 1号店として東京・高輪に店舗をオープンし、2017年現在29店舗を数える。

